一九八〇年文学部卒

前原真証
陶芸家

私が龍大に入学した73年当時、学生運動が下火になったとはいえ、学内ではヘルメット学生が隊列を組んで行進し、小競り合いも頻繁にありました。勿論、紫英館や紫朋館もなく、図書館裏にバラック建てのクラブボックスが立ち並び、その一角の美術部に入部した当時の龍大がなつかしく思い出されます。田舎から出てきたばかりの私は、「自由と思想」という洗礼を強烈に受けました。絵筆を取ってもそこに「自由と思想」がなければ、自己が埋没してしまう焦燥感にかられる毎日でした。あのボックスには学生達の自由と情熱があり、数々の恋もありました。現在私は、それらを肥やしにしているか自問自答する今日この頃です。

三条大橋を渡り、鴨川の流れと北山連山を眺めるたびに私は15年前の出来事を思い出します。当時、美術部で日本画を描くことに熱中していた私は、友禅の絵師をしておられたOBの戸田伸一氏から、「川の流れは中央部より川岸に近い所の方が速く流れ、山は樹木からでるガスの影響で遠くになるほど緑から青に近付いていく」。また、三条大橋を渡りきったところに咲いていた花を見ながら、どんなに垂れている葉でもほとんどその先端は上に向いていること、感動を呼び起こす絵には、その裏付けとして、必ず作者の鋭い観察眼があることを教えて頂きました。この風景が、何事につけても観察することの大切さを語りかけてくれるのです。

一九八〇年法学部卒

町田徳男
京都商工会議所

一九八一年文学部卒

三宅就博
倉敷市庄郵便局長

左京区の北の外れに鞍馬温泉がある。温泉と言っても洞窟式の蒸風呂で、背を屈めて入らねばならない程狭い。中は2〜3畳程の空間で一面にむしろが敷かれてある。裸電球が1つぶら下がっているだけの薄暗く簡単なものである。晩夏に訪れると、ひぐらしの声が聞こえるだけで禅でも組むかのように不思議と「無」の境地になれる。そんな風情を楽しもうと学生時代友人とよく行ったものである。桜が乱舞する季節や紅葉が映える頃などまた一段と趣がある。何かと理由付けしては遊び酒を交わす機会をつくって楽しんだ頃が懐しい。

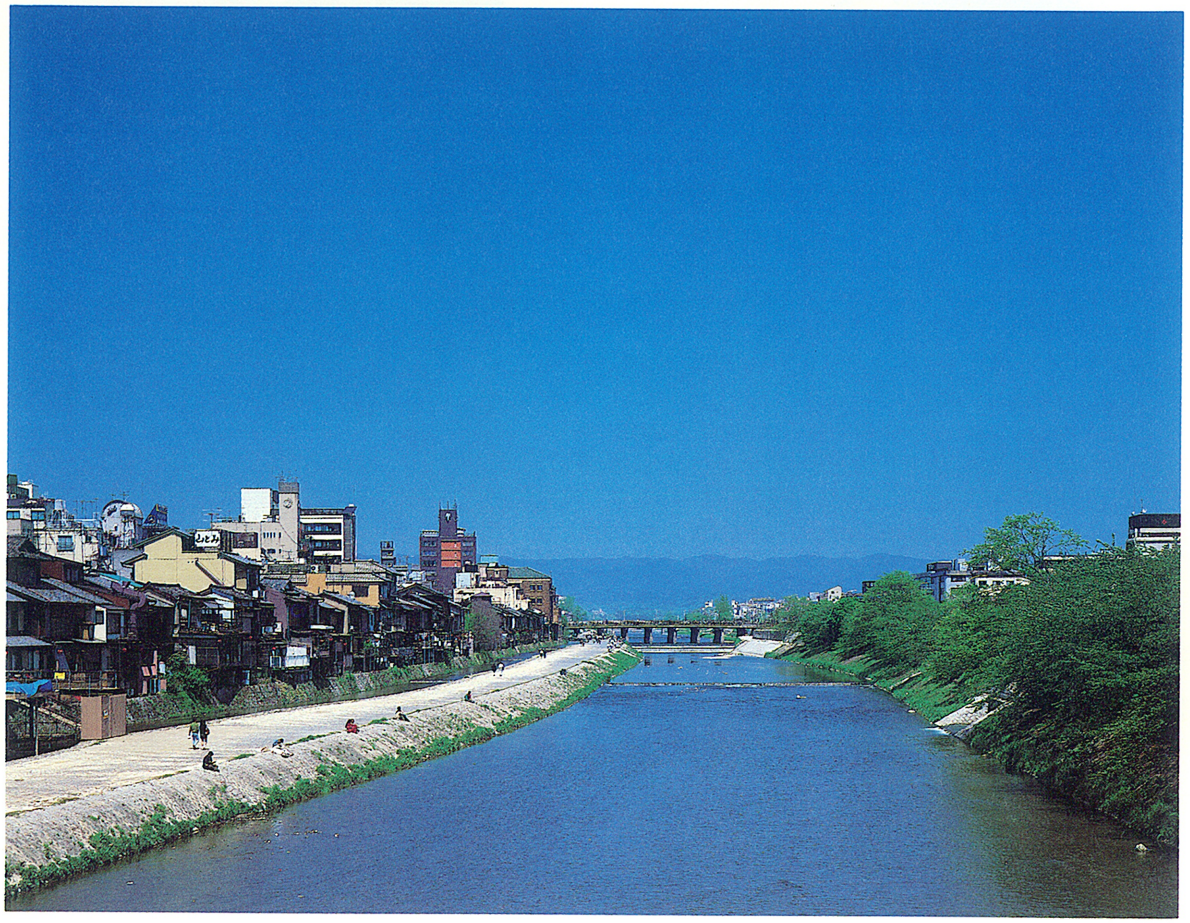
社会人になるとお金を掛けないと何も楽しめないような錯覚を起こしてしまうが、例えば街角の大衆浴場などつい見逃してしまいそうなくつろぎスペースがどこにでもあるはず。

気忙しいこんな時代こそ、素朴な遊び心を大切にしたいものである。

一九八一年法学部卒

米倉隆（株）ルシアン

夢は夕べの鴨川か――部活動をしていた私には、非常に心に残っている逍遥歌の一節です。降誕会の提灯行列の後、鴨の川原で車座になり先輩・後輩・同輩と夜中まで飲んだ酒。祇園祭の時、女房と初めて手をつないで歩いた鴨の川原の思い出。私は、今仕事上東京で生活していますが、年に一度社内行事で京都出張があります。その時は必ず四条大橋まで行き、鴨川に会いにいきます。京の町並みは、日々変化しますが鴨川の流れは学生時代も今も変わりません。鴨の流れを見ていると今でも学生時代にタイムスリップした気がします。夢は夕べの鴨川か、鴨の流れを観ながら今年も学生時代の夢を見ることでしょう。



哲学の道と呼ばれる散策路を何度も歩いた思い出がある。といっても難しく思索に耽るというのではなく、周りの神社や寺などに興味をそそられたのでもなく、ただボーッと歩いていたわけで、とにかくあの頃、南禅寺からこの散策路に流れる一連の雰囲気が妙に気に入っていた。途中ちょっとのぞいてみたくなるようなシャレた喫茶店が何軒かあったのを覚えている。若王子橋畔から始まり疏水の西べりを北へ一般には銀閣寺までのこの散策路は芝居がかった感じもするが、そこがまた観光地らしくてよい。そういえば、帰りによく食べたラーメンはおよそ京都のイメージからはほど遠い根性もののこってりだった。

一九八二年法学部卒

青木廉典（株）帝国データバンク

一九八三年経済学部卒

武市眞治（株）タカシマヤ・アーバンデザイン・システム

7月初旬のある日、東京出張中に「京都河原町御池のホテル高層化」の話題。あの街角に60メートルの壁ができるという。夏の「祇園祭」での山鉾巡行は、この河原町御池角で北から西へと大きく方向転換する。竹を道路に敷きつめ、水を打ち、鉾の大きな車を滑らす。辻廻し、巡行の山場である。僕自身、龍大生の頃アルバイトで鉾を引いた経験から言うと、この方向転換はハタで見ているほど難しいものではなかった。練習時、ひと引きでクルリと鉾は向きを変える。安全面もあろうが、「有難く見せるよう、2回か3回で行なうように！」と鉾町の人から指示を受けた。周辺ビルの屋上から見ても高い鉾が回転し、しなる姿は迫力がある。龍大生の引く鉾は「月鉾」、京大の「長刀鉾」に負けない背丈があった。

一九八三年法学部卒

中小路友司
大阪魚市場（株）

当時学生課の掲示板を見て、色々なアルバイトをしましたが、中でも京都の大学に通っていたからこそ体験できたアルバイトがありました。それは、京都三大祭りの祇園祭と時代祭りのアルバイトです。祇園祭は、山鉾巡行の月鉾か菊水鉾を引く仕事で、時代祭りは、江戸時代の参勤交代を当時の衣装でねり歩く仕事です。たった一日のアルバイトですが、交通規制をした京都のメイン通りを大勢の見物人の中、のんびりと歩くのはなかなか気分が良いものですし、祭りに参加している喜び・楽しさが感じられました。在学中は、3年連続でこのアルバイトをしてきましたので、今でもTV等で紹介されると学生時代の自分を思い出します。

一九八五年法学部卒

山本浩之
関西TVキャスター

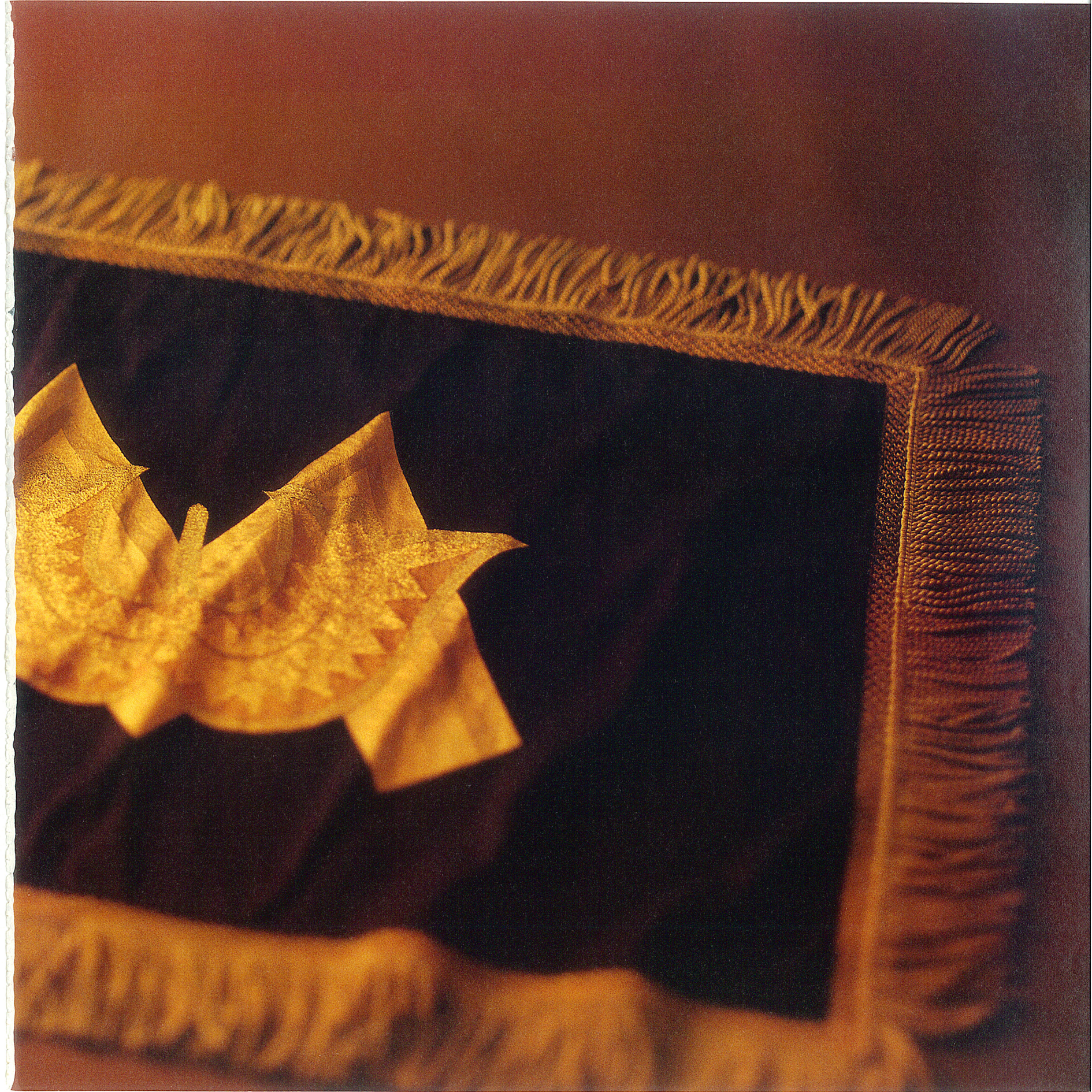
アレは、3回生の終わり。私を含めゼミ生3人は、（因みにゼミは3人だけでした）親睦をより深めようと、龍大生ならご存じ「近善」へと繰りだしました。ホロ酔気分で2次会へ。大学近くの某所へ玉突きに行った我々は、とんでもない事をしてしまいました。ゲームは白熱し、佳境に入った折、身のほど知らずの私が「マッセ」に失敗、1センチの傷を緑の絨毯に付けてしまいました。弁償金のない3人は、チームワークのよさ!?で、早急にプレーを済ませ、足早に店を出てしまったのです。あれから10年近く悩み続けたのは、ウソですが、この際紙面をお借りして、丁重にお詫び申し上げます。

一九九二年法学部卒

鈴木雅子
龍谷大学職員

学生時代の思い出のひとつに祇園祭でのアルバイトがあります。地方出身の私は京都の祇園祭を見るのを楽しみにしていたのですが、ちょうどその頃に友人が祇園祭のアルバイトを見つけてきたのです。本物の巫女さながらに着付けをして頂いたことや鉾の近くでお祭り見学を悠々とできたことに大満足でした。本物の巫女と思い写真を撮っていく観光客もいましたが、龍大の学生だということは黙っていました。現在は、烏丸界隈の住人も減り、まわりの銀行や会社の方が手伝ったり、学生アルバイトも増えていると聞きます。でも、私にとって京都らしい情緒を味わえた楽しい思い出です。

人が伝説を生み、伝説が人々を魅了する——。
龍谷大学の350有余年という悠久の歴史に育まれ、編み出された数々の逸話。
諸先輩から受け継がれてきた龍谷大学ならではの伝説をお楽しみください。



龍大伝説を語る I

THE TRADITIONS OF RYUKOKU I

降誕会前日の午後、
龍大の自慢話に花を咲かせようと、
OBが京都市内に集まった。龍大350年の伝統、
自由な風土、世界に誇る校章、学歌……。
語り合う声に重なって聞こえてきたのは
ブラスバンドの音。河原町通りを行く
龍大の提灯行列である。出席者たちは
自分が行列にくわわった学生時代にタイムスリップ。
龍大自慢はますます熱気をおびた。

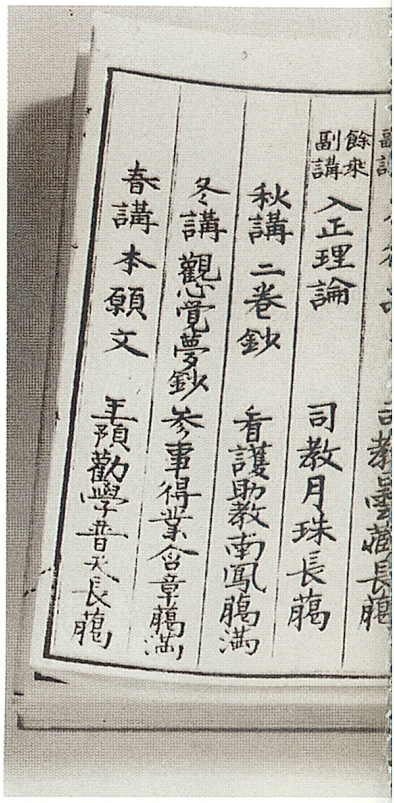
講義の開始・終了を告げた雲板
現在も本館講堂で用いられている

[出席者]

太田信隆　関西女子美術短期大学教授
　　龍谷大学講師・元NHK記者‥‥昭和29年／文学部卒業
花月大誠　龍谷大学年史編纂室・
　　元京都新聞社編集委員 ‥‥‥‥昭和27年／文学部卒業
増田省三　京都ロイヤルホテル企画室長・昭和47年／法学部卒業
弘中裕三　緑書房 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥昭和48年／法学部卒業
佐野　純　龍谷大学職員‥‥‥‥‥‥‥‥‥昭和49年／法学部卒業

THE TRADITIONS OF RYUKOKU I

学寮の創設者・良如上人



安居講業記

創立354年日本でいちばん古い大学

――卒業してから同窓会の活動を通じて、全国各地にいらっしゃる先輩方にお会いする機会が多くなりました。酒の席などで、龍大の伝統の重みをしみじみと感じる話や、俗っぽいけど小気味のいい話をお聞きしました。そうするうちに、龍大には、意外と自分たち自身も気づいていない、すごい部分があるんじゃあないかという気がしてきたんです。

私は、大学にかよった時代よりも、むしろ卒業してから、龍大に対する愛着というか、帰属意識が強くなったように思います。

――法学部がはじめての卒業生を送りだしてから20年。しかしその20年を支える350年のながい歴史が連綿とながれている。けっして20年だけが法学部の歴史というわけじゃあない。深い根っこの部分があるわけですよ。

――そのとおりですね。

龍大は、寛永16(1639)年に始まるんだけれども。その当時に現在の学校の運営と同様の教育施設と運営をまかなう資金をもち、60人も収容できるたいへん立派な学生寮で始まる。最初からそれだけの体裁をととのえていたんです。また、その当時からの記録もきちんとした形で現存しています。

日本の私学の多くは仮住まいや侍屋敷の庇を借りた格好で始まるんですから、これは大変なことだったんですよ。

――龍谷大学は今年で創立354年。日本でいちばん古い大学であることを、はっきり認知すべきですね。

――途中、山あり谷ありで、いろいろな歴史をたどってきたわけですけれども、名前だけではなしに、「教える」「学ぶ」ということがずうっと続いてきた。その歴史が伝わっていることの意味は大きい。

――昭和37年頃、ハワイ大学の学長就任式があって、世界中の有名大学の学長に招待状が届いた。

龍大からは、病床におられた増山顕珠学長の代理として森川智徳先生(増山学長の前任学長で、当時・ハワイの本願寺開教総長)が式典に出席されています。世界各国からたくさんの学長が出席されたそうです。

そこでは創立年代の古い順に席が設けられた。龍大は1636年に創立のハーバード大学についで、2番目の席だったそうです。ヨーロッパの大学が出席していなかったのかもしれないんですが…。

とにかく日本の大学では、いちばん古かったわけです。日本のほかの私大などは、はるか彼方、入口のほうで霞んでいたといわれますからね。

親鸞は教育者を超えた大きな存在

――大学の寄附行為にも「教育基本法と学校教育法により、浄土真宗の精神に基づく教育をほどこすことを目的とする」とあるように、龍大のバックボーンは、「真実を求め、真実に生きん」という親鸞精神です。

親鸞の主著である『教行信証』、またその弟子の唯円がつくった親鸞の語録『歎異抄』をドイツの有名な哲学者ハイデッカー(Martin Heidegger 1889〜1976、主著『存在と時間』)が読んで驚愕し、影響を受けたという話がある。

親鸞聖人は、世界的な宗教家であり、哲学者、思想家です。そこがハイデッカーを驚愕させたゆえんだと思うんです。教育者というレベルをはるかに超えた大きな存在なんですよ。

――他の私学と比較するとき注意したいのは、龍大の場合、あくまでも親鸞精神がバックボーンになっているのであって、親鸞が創立したわけじゃあないということ。

しかし先のエピソードにもあるように、国際的な哲学者にも影響力を与えた親鸞の思想が、龍大の建学の精神のなかに生きつづけていることは、誇るべきことだと思います。

――龍大の場合は本願寺教団の学校だったわけですよね。

――寛永16(1639)年に、本願寺第13世良如(りょうにょ)宗主によって西本願寺の境内に「学寮」ができます。

「学寮」は安居(あんご)スタイルでスタートした。

安居はいまも続いています。

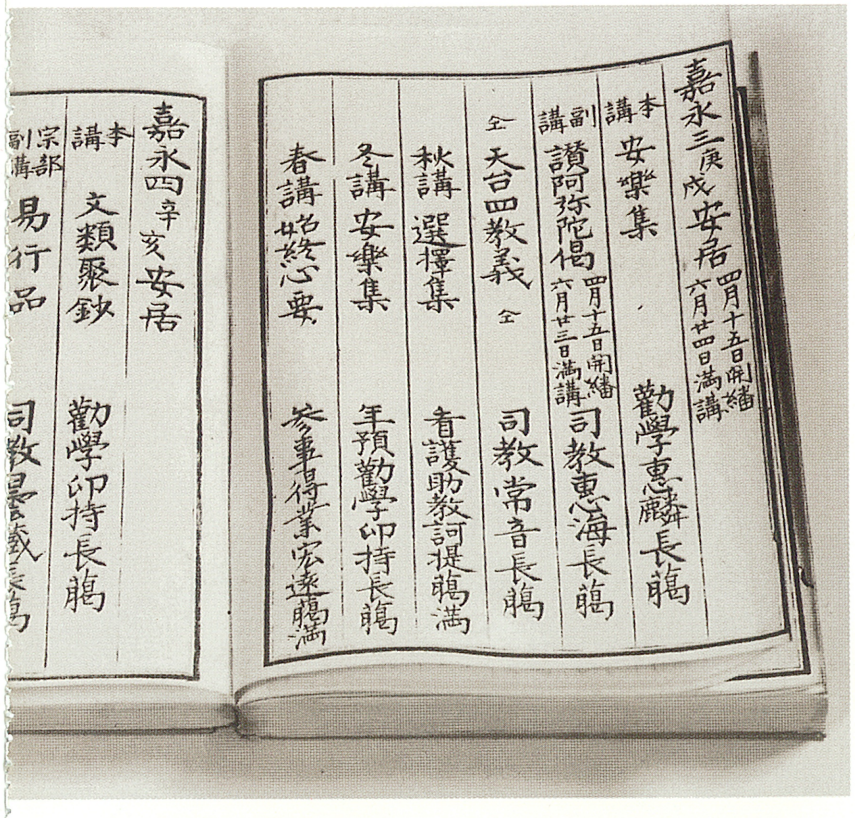
――仏教の生まれたインドで、雨季には外へ托鉢に出られないでしょう。そのあいだに、集中講座を設けて勉強したわけです。

安居というのは、そうとう厳しい、真剣な学問所だったと思うね。

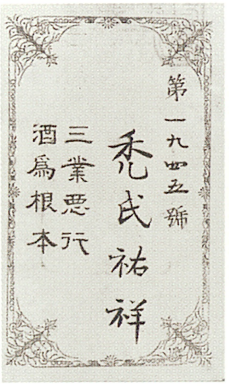
――やはり安居が発展していったんですかね、龍大は。

――そう、もともと安居スタイルで、やって

1898年に改題の「中央公論」第1号と英文の「反省会雑誌」



反省会雜誌



反省会の会員証

きたわけです。

学校を藩校、家塾、私塾と三つに分けると、龍大は藩校ですね。経済的なつながりなどから考えても、ある意味で本願寺の藩校です。だから規模も大きかった。

良如宗主は、当時、たいへんな文化人であったし、龍大はその人の志を生かして誕生した。そしていま、親鸞聖人の教えを建学の精神として育ってきた大学なんです。

――世界に通用する宗教家であり、哲学者である親鸞の思想が、龍大の建学の精神を貫いている。こんな話を、世界に誇れる大学はうちぐらいのものでしょうね。

――大学というのは、人間教育の総仕上げの場だと思うのです。

戦後、たくさんの大学ができて、それぞれ人材を輩出するための一種の競争があったわけです。そうしたなかで、大学の近代化、施設の充実、そういった面はお金で買えたし、また経営でつくり出せるものでもあったと思います。

しかし人をつくる場である大学には、深みが求められる。私たちは簡単に350年と言ってのけるし、耳にタコができるほど聞いているから、「ああ、古いんだな」という感じですけれども。

金で買えない、掛けがえのない350年の歴史をもっていることは、本当に大きな財産です。目には見えないこの蓄積は、他に類例がないんだということを、あらためてかみしめなくっちゃいけないと思う。

それはたんに名誉とか誇りとかいう格式ばった意味ではなくて、われわれの励み、エネルギーにしてゆくという意味でね。

――国籍を変えることはできても、母校を変えることはできないんですから。

このエネルギーをのちのちに伝えて行くことが、また伝統をつくっていくんだと思う。

『中央公論』のふるさと

――言論雑誌で有名な『中央公論』。これは龍大の『反省会雑誌』がベースになったんですね。

――そうです。『中央公論』の創刊号は龍大でつくられたんですよ。これは龍大の歴史とも関係している。経済、経営、法学部などの学部が生まれて、総合大学に転身していく、その流れにもつながると思うんですが。

――「反省会」は、明治19年にできた禁酒運動の母体です。

その機関誌として『反省会雑誌』が明治20年の8月から発刊される。のちに『反省雑誌』と改題されたりしますが、これは和・英、両文で発行されていたんですよ。

――明治政府がやった廃仏毀釈は、かなり前に収束はしているものの、仏教への批判がまだずいぶんあったんです。そこで社会の浄化のために、仏教自身が襟をただすというか、身をつつしんでいかないといけない、と。その一つには酒を絶つことだというので、「普通教校」の学生や教授を中心として禁酒運動がはじまり、「反省会」ができた。

――『反省会雑誌』は明治20年の8月にスタートして、その年の12月から月刊誌になりま

す。明治29年には、この社会改良運動の会員も2万名に達していた。この発展とともに東京へ編集が移る。

『中央公論』という名前になるのは明治32年なんです。やがて編集を委ねることになり、総合雑誌へと発展してゆくわけです。

――一人の経営者とか統率者によってではなく、仲間のなかで反省していこうという意識が生まれた。そのために機関誌を発刊した。日本ジャーナリズムの原初の形ですね。それも学生の側から出てきたところに、おもしろさがあると思います。

――けっして営利目的でない。自分たちの役にたつ物をつくろうという動きですからね。

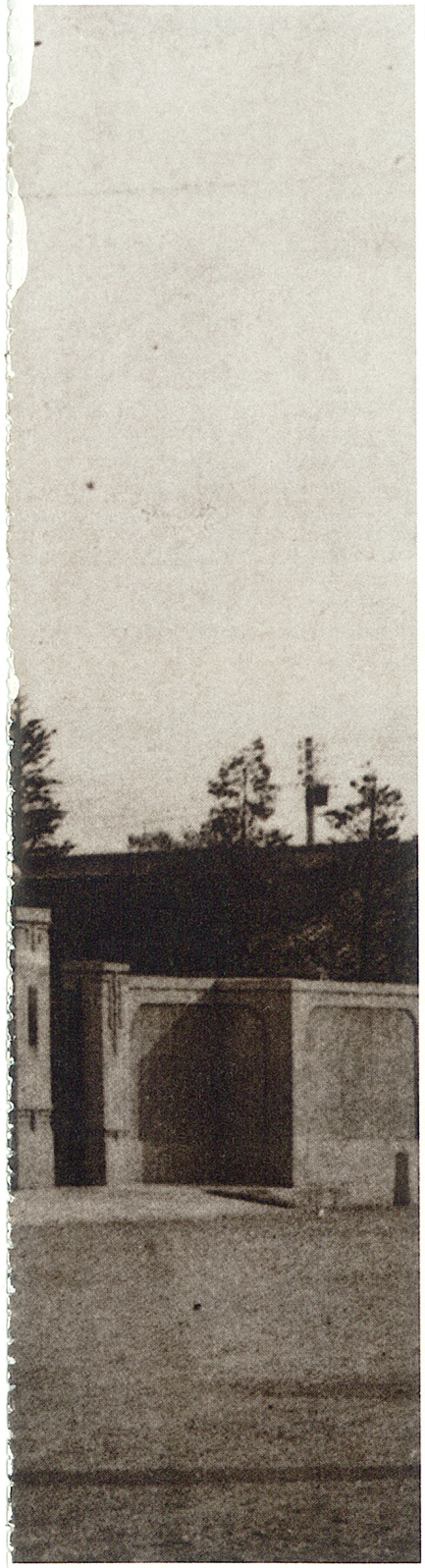
――お互いのなかの啓蒙誌ですよね。普通の出版は宣伝媒体であったり、思想を広めてゆくものであったりするんですが、『反省会雑誌』のスタートは、ちょっと見つめてみると性格がちがう。

いかにも龍大の学生から出たということが納得できる気がします。

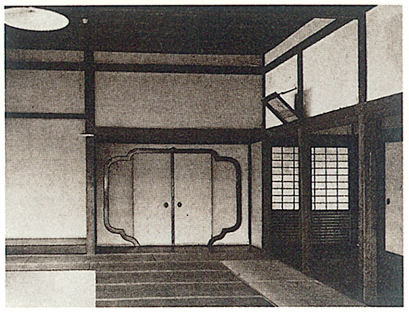
『普通教校』の時代
――『反省会雑誌』をうみだした土壌

――『反省会雑誌』の誕生は、高楠順次郎や杉村楚人冠という大人物を輩出した、龍大のリベラルな風土を象徴しているようにも思いますね。

普通、宗門の学校だから抹香臭くて道徳的というかなあ、おもしろみのないパターンにはまった人間が出てきそうだけれども、そこに伸び伸びとした自由人が出てくるあたりが、



1885年に現在の東黌の地に普通教校がおかれた
（写真は1928年当時の東黌）



普通教校の講堂にあてられた林中堂

龍大のいいところだと思う。

――龍大のカラーでもあるということでしょう。

――高楠順次郎は、のちに世界的な仏教学者になった人ですが、「普通教校」で学んだ人として有名ですね。

――朝日新聞の論説にいた杉村楚人冠も、「普通教校」の出身で、名文家として有名です。日本の新聞界にこの人ありと、いまだに名前の残る人ですよ。

――「普通教校」の時代というのは、龍大354年の歴史のなかでも、とくに興味深い部分だと思います。

――そうですね。

龍大のスタートは、あくまでお寺の学校です。しかし同時に一般の人に向けた学校でもあらねばならない。そういう二つの考えがあったのです。

少し過去にさかのぼってお話しすると、明治5年のはじめに、西本願寺が日本の宗教界で最初に欧州視察をします。梅上沢融、島地黙雷、赤松連城らを、ヨーロッパに派遣したんです。これが本願寺学制の刷新に寄与することになる。

岩倉使節団が行ったすぐあとに視察団を出し、留学生を送り出す。文明開化を、日本の宗教界の先頭にたって採り入れたのです。

そこで得た海外の知識が、それまでの「学寮」や「学林」はこのままではいけないという考え方につながって、たびたび改革をこころみます。

明治8年には、「普通学」を開講する。それが明治12年の制度の改革に際し、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の学寮組織も参考にして「大教校」となる。いまの大宮学舎の誕生です。新しい学校の体裁、内容をととのえてスタートするんです。

――そのときの講堂と寄宿舎が現在の大宮学舎本館と南北の教室棟。当時、日本でも有数の洋風建築だった。

龍大のシンボルともいえる本館は1964年に、国の重要文化財に指定されています。

――その後、いろいろな経緯があるんですけれども、明治18年に「普通教校」というのができる。

仏教だけではなくて普通学、つまり哲学とか地理とか歴史などを教えはじめた。

――普通学と呼ばれたものには、数学、物理学、化学、論理学、心理学、文学、世態学（社会学のこと）、道義学（倫理学）、経済学などがありました。

その当時すでに、人文・社会・自然の三系列の基礎学を整備していたというからすごいですね。

――その後、地理学、世界史、天文学、生物学なども増設される。

これらの科目のテキストがほとんど英書であったというのも、驚きですよね。

――京都では、新島襄の「同志社」がキリスト教精神による新しい教育を展開していたころでしょう。

「普通教校」はそれと並んで、けっこう大胆な活動をしていたわけです。

――当時の学生気質を伝えるエピソードがあります。

学生たちが校風の一新を叫んで同盟を結び、学校当局に要求書を提出した。

「1.洋服を採用して制服とされたい。
2.日本人教師の英語では不十分だから、外人教師を雇い入れてほしい。
3.寄宿舎の食事を改良して、毎朝卵を一つずつつけてほしい。」

この要求書の筆頭に署名したのは、高楠順次郎だったそうです。

――「普通教校」の時代、明治21年7月創刊の『亜細亜の寶珠』も英文の雑誌です。学生の手によって英文雑誌まで出しているんですよ。

発行されたのは英文雑誌であったけれども、この当時、すでに普通学の一つとしてドイツ語やフランス語もあったそうです。そのころの学校としては、たいへんレベルが高かったと思います。

――新しいところでは、昭和57年の春から2年間、五木寛之さんが龍大に聴講生として通っていたでしょう。

これも龍大の自由な風土にひかれてということがあったんじゃあないでしょうか。

――菩提寺のご縁もあったし、聴講に来る前年に龍大の創立記念降誕会に講師として招かれたとき、龍大の雰囲気が気にいって、もう一度こんな大学で勉強してみたいと思ったのが、龍大に通うきっかけになったといいますからね。

――明日は降誕会ですが、これも西欧的な考え方だと思いますよ。

THE TRADITIONS OF RYUKOKU I

日本では、人が死んだのを大事にする。命日とか、年忌はよく覚えている。

降誕会というのは、親鸞聖人が生まれた日です。生まれた日を祝うのは、ヨーロッパの考え方ですが、こういうのを一番に採り入れたのが本願寺なんです。風俗、習慣までも採り入れているということですね。

――「普通教校」で、『反省会雑誌』の始まる明治20年に、降誕会が始まっています。

これも進取の気性がなかったらできない。日本人共通の考え方として、死んだ日がいつかは考えるけれども、誕生日を祝うというのは先進性があったと思います。

ユニークな徽章

――話は変わりますが、新聞に日本のおもな大学の校章が出ているのを見ました。たしか大学の学生募集の広告だったと思う。ずらっと並んでいるのを見ると、「大学」の文字をモチーフにしたものがたくさんありましたが、そのなかで龍大の徽章は、「大学」という文字を使っていない。

これを決めた当時は、勇気がいることだったと思います。みんな東京大学にならえというので、「大学」の文字を象形文字みたいにデザインして入れたのでしょうね。

――龍大の徽章は、本願寺の紋所である八角菊くずしの一部(M)と、仏・法・僧を表す「三宝章(W)」を組み合わせたものです。

――明治39年1月に、学帽の制定と同時に制定されました。

――制定された当時、東京で校章図案のコンクールがあって、2等賞になったといわれています。

――昭和20年代か昭和30年代にあった世界大学紋章コンクールでも、龍大のマークはかなり上位に入賞したらしい。

外国人からみても、コンセプトがはっきりしていた。建学の精神を象徴する、模倣でないユニークさがあったんでしょうね。

――デザイン的にも洒落た雰囲気ですから、選ばれたんでしょう。

――外国人の目にも、独創的でナウく見えた。大学らしさを感じたんじゃあないかと思うんですけれども。

――「三宝章」というのは、インドのアショカ王がインド中部のサンチーにつくった大仏塔にあるデザインです。

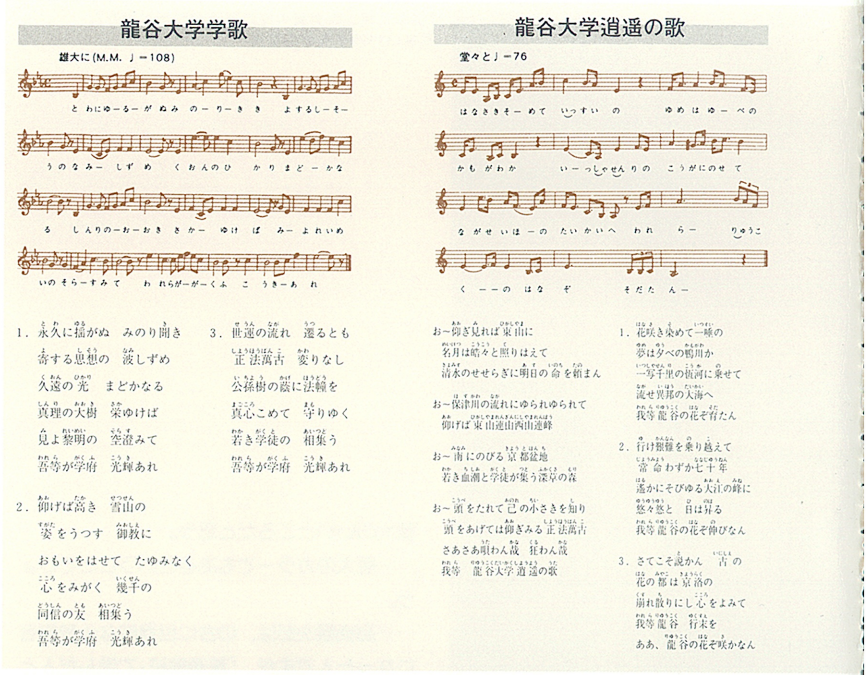
――大塔の四辺にある石門の彫刻は、アジャンタの壁画とともにインド仏教美術を代表するものです。

龍大の徽章になっているのは、このサンチーの石門の頂上にあって、いちばん目立つ彫刻です。この大塔に詣でる仏教徒たちの仏・法・僧の三宝に帰依する心をあらわすシンボルであるとみて、これを「三宝章」と呼んだんですね。

――東京・高輪の仏教大学の時代に、「これが仏教のしるしだから適切だろう」といって、サンチーの塔門の三宝章を示されたのが、高楠順次郎先生であったといわれます。

――そういう意味では、インターナショナルなデザインといえる。

インドと日本、そしてお釈迦さんと親鸞聖



龍谷大学学歌

雄大に(M.M. ♩=108)

とわにゆーるーがぬみ のーりーき き よするしーそー
うのなみー しずめ くおんのひ かりまどーかな
る しんりのーかーおき きかー ゆけ ば みー よれいめ
いのそらーすみて われらがーくーふ こ うきーあ れ

1. 永久に揺がぬ みのり開き
寄する思想の 波しずめ
久遠の光 まどかなる
眞理の大樹 栄ゆけば
見よ黎明の 空澄みて
吾等が学府 光輝あれ

2. 仰げば高き 雪山の
姿をうつす 御教に
おもいをはせて たゆみなく
心をみがく 幾千の
同信の友 相集う
吾等が学府 光輝あれ

3. 世遠の流れ 遷るとも
正法萬古 変りなし
公孫樹の蔭に法輪を
眞心こめて 守りゆく
若き学徒の 相集う
吾等が学府 光輝あれ

龍谷大学逍遥の歌

堂々と♩=76

はなさきそーめて いーすい の ゆめはゆーべの
かもがわか いーっしせんりの こうがにのせて
ながせいはーの たいかいへ われ らー りゅうこ
くーーの はな ぞ そだたんー

お一仰ぎ見れば 東山に
名月は皓々と照りはえて
清水のせせらぎに明日の命を祈まん

お一保津川の流れにゆられゆられて
仰げば 東山遠山西山遠峰

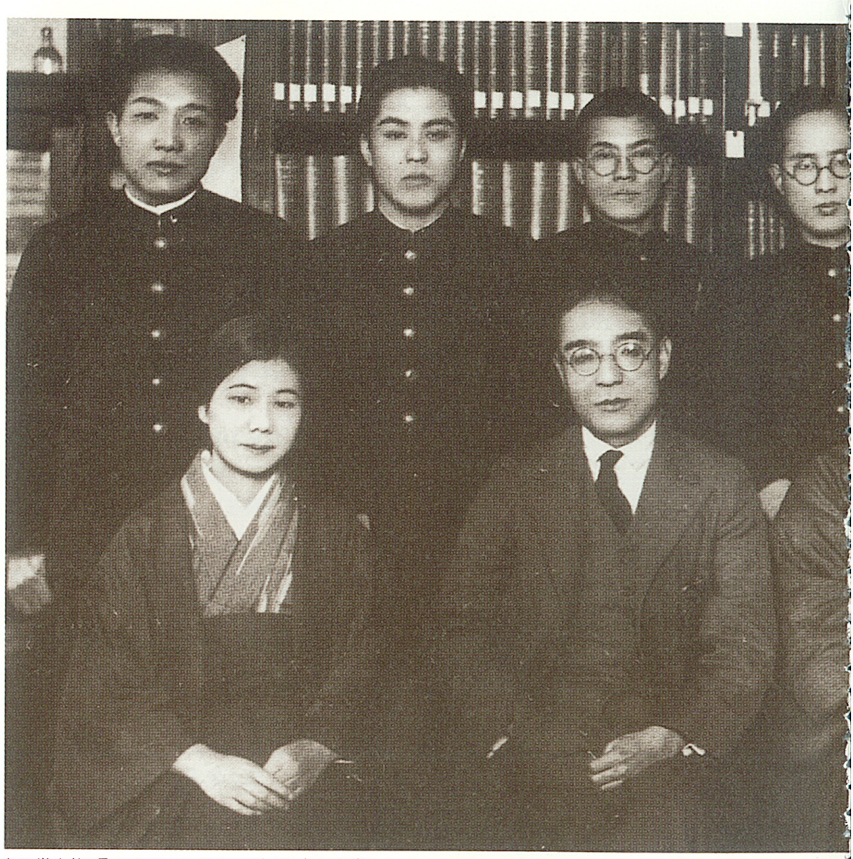
お一浦にのびる 京都盆地
若き血潮と学徒が集う深草の森

お一道をたれて己の小さきを知り
道をあげては仰ぎみる正法萬古
さあさあ唄わん 哉 舞わん 哉
我等 龍谷大学逍遥の歌

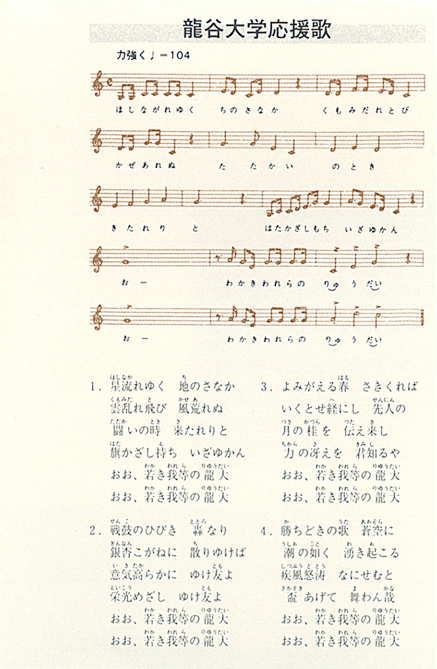
1. 花咲き乱めて一様の
夢は夕べの鴨川か
一写千里の桂河に乗せて
流せ異邦の大海へ
我等 龍谷の花ぞ有たん

2. 行け猛鷹を乗り越えて
常命わずか七十年
遥かにそびゆる大江の峰に
悠々悠と 日は昇る
我等 龍谷の花ぞ伸びなん

3. さてこそ読かん 吉の
花の都は 京洛の
崩れ散りにし心をよみて
我等 龍谷 行末を
ああ、龍谷の花ぞ咲かなん



女子学生第1号の山下よしゑさんが1928年に入学



龍谷大学応援歌

力強くｊ＝104

はしながれゆく　ちのさなか　くもみだれとび

かぜあれぬ　たたかい　のとき

きたれり　と　はたかざしもち　いざゆかん

おー　わかきわれらの　りゅうだい

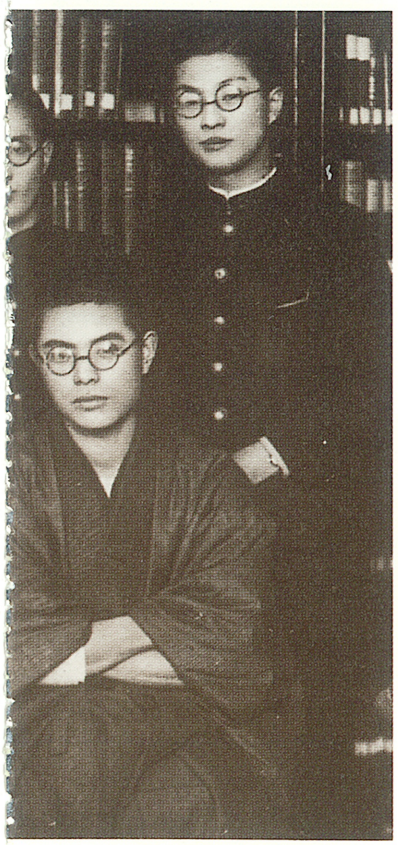
おー　わかきわれらの　りゅうだい

1. 星流れゆく　地のさなか
雲乱れ飛び　風荒れぬ
闘いの時　来たれりと
旗かざし持ち　いざゆかん
おお、若き我等の龍大
おお、若き我等の龍大

2. 戦鼓のひびき　轟なり
銀杏こがねに　散りゆけば
意気高らかに　ゆけ友よ
栄光めざし　ゆけ友よ
おお、若き我等の龍大
おお、若き我等の龍大

3. よみがえる春　さきくれば
いくとせ経にし　先人の
月の椎を　伝え来し
力の源えを　君知るや
おお、若き我等の龍大
おお、若き我等の龍大

4. 勝ちどきの歌　蒼空に
潮の如く　湧き起こる
疾風怒涛　なにせむと
歩あげて　舞わん茂
おお、若き我等の龍大
おお、若き我等の龍大



徽章をあしらった校旗

人の融合・合体というか、ある意味ではたいへんスケールが大きいものです。そのよさが認められるデザインであるといえますね。

――いま、世界のデザイナーが知恵を集めても、この徽章はできないでしょうねえ。

山田耕筰も自賛した学歌

――学生に親しまれている歌として「学歌」、「応援歌」、「逍遙の歌」の3つがある。そのなかで龍大の学歌は、山田耕筰さんの作曲です。

――どういうご縁かはわからないけれども、学歌作製委員会で、その当時、超一流の作曲家山田耕筰氏に頼もうということになった。昭和十年代ごろのことだと思います。

詞をつくって、100万円をもって東京まで頼みに行ったそうです。

――いまのお金にすればすごい額でしょう。

――山田耕筰さんは「学歌はつくらない主義」だったらしい。最初は門前払いだったが、龍谷大学が西本願寺の学校だときいて、そういうことならつくろうと快くひきうけてくださった。

――学歌ができておひろめをしたときに、山田耕筰さん自身が「頼まれてつくった歌が3,000ほどあるが、そのなかで気にいった歌のベスト3に入る」と言ったそうですね。

――私もその話は聞いたことがある。

身びいきに聞こえるかもしれないが、本当にいい歌だと思います。

――応援歌は吉田光邦さんでしょう。

――作詞・作曲者不詳のままで歌いつがれていたんですが、吉田光邦さんの亡くなる直前に、作詞が吉田光邦さんだと判明した。

――曲は、龍大男声合唱団の指揮者であった藤沢憲雄さんです。

藤沢さんが『校友会報』の第26号に、「昭和24年だったと思いますが、応援団長の三輪善海君から作詞者の名前のない詞を渡されて作曲を依頼されました。…(中略)…応援団は応援歌発表記念ダンスパーティーを円山公園のあたりで開き、ここで作詞・作曲者が紹介されて、吉田光邦先生にはじめてお目にかかりました」と、吉田先生がお亡くなりになった直後に、思い出を書いておられました。

――歌ではないけれども、チャイムも他の大学とちがう。

あれは仏教の聖歌からとったんですよね。

――チャイムの仏教聖歌を採用したのは、学園紛争以後のことですが、なかなか情緒があります。

宗派・僧俗・男女を問わず――開かれた大学

――男女共学になったのは日本で一番早かったんじゃあないですか。

――それは聞いたことがあります。

ただ龍大は、はじめから男女共学だったんでしょう。はじめから制限などしていなかったという話も聞いた。

――昭和のはじめに女性2人が入っておられる。日本の私学では、早いんだろうと思いますね。

――仏教系の大学はたくさんあって、いまはそれぞれ充実した大学になっているけれども、東大寺・元管長の清水公照師や薬師寺管長の高田好胤師、法隆寺前管長の大野可圓師と、現管長の桝田秀山師など、宗派に関係なく、そういう方のほとんどが龍大卒であることは、誇りにしてよいことです。

――文学部だけの歴史がながかったけれども、天台宗や法相宗の人も勉強しにきた。普通教校になって一般の人も受け入れたわけですしね。

――早くから開かれた大学としてやってきた。たんに西本願寺の大学ではなしに、仏教系の学を志さんとした人たちは、しぜんと龍大へ来て勉強した。奈良、比叡山関係の寺院の子弟は、ほとんどが龍大で勉強したし、南都のお寺の管長さんたちも、ほとんど龍大出身ですよ。

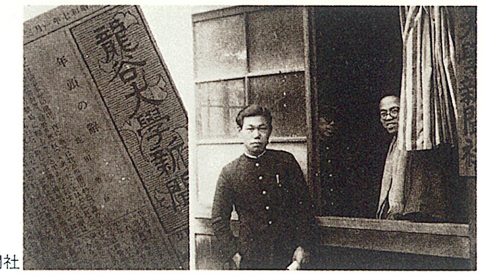
――本願寺という組織が、大きく影響している。学を志して全国から人間が集まってきた。わざわざ京都へ勉強にくるには、才能だけでなく財力もなければできなかったでしょう。

――その時代のエリートですね。

――そういう人たちをひきつけた理由として、教授陣に各宗学のエキスパートがそろっていたことがある。法相、華厳、天台などのおもだった碩学をそろえ、その人たちの謦咳(けいがい)に接することができた。

――戦前、戦後のあいだしばらくは京都大学からいらっしゃった先生も多くて、ときの最高レベルの先生方が龍大におられた。それは、人材を輩出するうえに大きなプラスになったと思います。

THE TRADITIONS OF RYUKOKU I



龍谷大学新聞と新聞社

大谷探検隊が持ち帰った資料の一部「無量余経」

「龍大さん」と呼ばれて、信用度は抜群

――学生時代の思い出ばなしになるけれども……。ぼくは下宿していたんですが、龍大生は信用があったんです。

――それはいえる。わりに社会的信用がありました。

――たとえば下宿を探すとき。2階の戸が閉まっている家を見つけて、「こんにちは」と入って行く。「下宿させてもらえませんか」と言うと、「どこの学生さんですか」と聞かれる。「龍大です」と答えると、「どうぞ」と二つ返事で貸してもらえた。

――「龍大さん」と「さん」づけで呼ばれていたのも、町の人に大事にされていたからだと思う。

――私は当時下宿していたところの人と、いまでもおつきあいがある。そういうのはありがたいご縁だと思います。

――樹徳寮という寮があったでしょう。

――JR西大路駅の近くにあった寮ですね。

――樹徳寮で寝食をともにすることで、交流が深まった。

――当時は、北海道から九州まで各府県出身の学生がいたから、龍大へ行ったら、全国の人と話ができるというのが魅力だった。その時代は、龍大に限らないかもしれないけれども…。

――寮に友だちを訪ねていって、洗面器でスキヤキをしたり、今では考えられないことをしたなあ。

――半面、朝の勤行もあって、寺の子供としての躾も厳しかったようです。

――経済学部ができた年に、寮は大宮・深草両学舎へ移される。

文学部の伝統というか、龍大の宗教的な伝統を保持するために、ここでは僧・俗をこえて、寮生全員がかけなければならない輪袈裟があった。その輪袈裟とお念珠と聖典をもって、朝夕お参りをする。これは学生紛争の前ぐらいまで続いたそうです。

当時の寮生の方が、「わけがわからないままに輪袈裟をかけさせられて、勤行をさせられた。ほとんどの人は受け身でやっていたが、いまとなってはとても懐かしい」とおっしゃっていました。

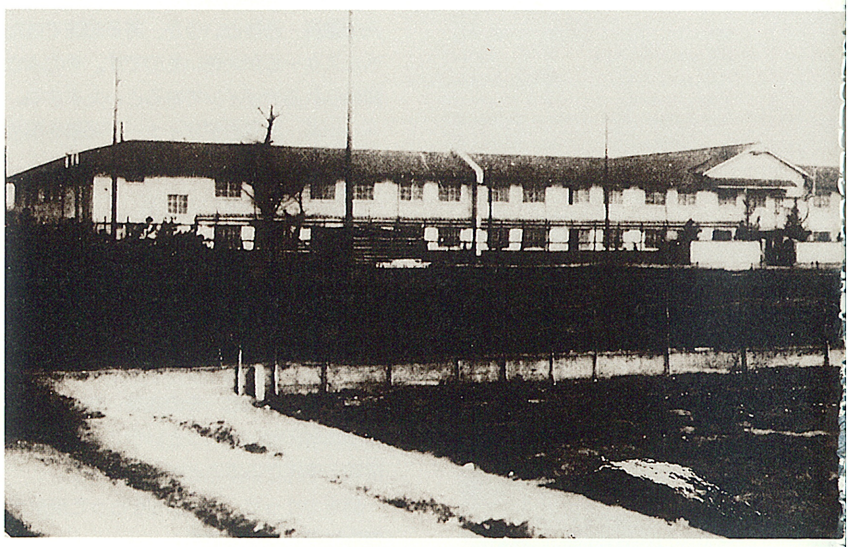
――戦後しばらくは食べ物に不自由しましたね。龍大名物の「びっくりうどん」というのがあって、でっかい丼ばちに入ったうどんがうまかったなあ。

――大宮図書館もけっこう学生の自慢だった。すごい蔵書量ですから。いまは本の価値観が変わってしまったけれども。

――本がたくさんあっても整理が面倒だし、マイクロフィルムに放り込める時代ですからね。

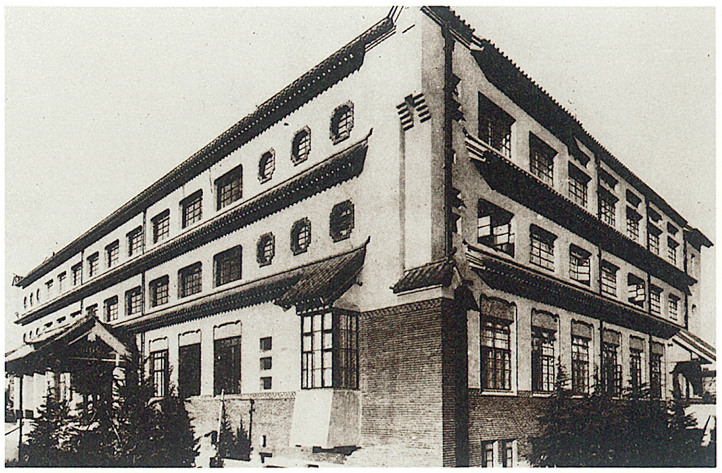
しかし散逸したら、ふたたび手に入らない物が龍大の図書館にはある。大谷探検隊がもち帰った世界の文化財といってもいい資料や、西本願寺歴代の門主が集められた写字台文庫旧蔵本などがあるでしょう。それらは本に対する価値観が変わろうとも、やはり貴重なものですよ。

――戦後しばらくのあいだは、「あなたはなぜ



1908年に落成した図書館後に、本願寺・宗務所として用いられた

1933年当時の相撲部



1936年に落成した現在の大宮図書館

「欧州桑道連盟」の設立を
介助した北畠教真氏(写真は昭和初頭)

1939年
南区唐橋に開設した樹徳寮

龍大へ行きましたか」と尋ねたら、「いい図書館があるから」という学生が多かったんです。

——大宮に約51万冊。深草に約42万冊。瀬田に約13万冊。全部あわせると、かるく100万冊をこえます。

昔は『螢雪時代』にも大学の図書館の蔵書量が一覧表になって載っていたぐらいだから、この図書館は値打ちがあった。大学の価値判断の基準にされていたのはたしかですね。法学部ができたころでさえそうでした。

文武両道で名を馳せた龍大

——クラブ活動は、体育系からいうと相撲部、柔道部、剣道部。やはり武道系が古いですね。それに強かった。

——明治35年ですから、京都仏教専門大学の時代、いまでいう学友会に、文芸部・講演部・運動部の三つの部がおかれました。

各運動系のクラブは、その後、この運動部から独立する形で発足する。

——たとえば柔道部の独立は明治43年です。庭球部と野球部が大正2年に独立しています。相撲部の独立は大正8年。

——柔道部が大正12年に満州へ遠征している。相撲部も満州へ行っていますよ。

そして大正10年から12年に相撲部は、「京都学生相撲大会」で3回連続優勝の快挙をなしとげている。

当時、龍大の相撲部には金丸という強い人がいて、京大か同志社の猿丸、犬丸の二人とともに「相撲界の三丸」と呼ばれていたそうです。

——北畠先生のお父さんですね。その方は柔道もやっていた。

——そうです。北畠教真(旧姓・金丸)さんといって、昭和のはじめにドイツのライプチヒ大学とベルリン大学に3年間留学されています。

そのとき、夏休みを利用して、柔道着を肩にヨーロッパの大学を行脚して、そこでヨーロッパの人たちに柔道を教えたそうです。

——ずいぶん豪快な先輩がいたんですね。

——どうやら「欧州柔道連盟」の設立にも関係されていたらしい。北畠さんご本人の書きつけも残っているそうです。

のちに参議院議員になられますが、東京オリンピックのときの裏話がある。

経費が足りないから、プールの上に畳を敷いて柔道をやったらどうかという話になっていた。「そんなことは、けしからん」と各大学の柔道部出身の議員さんが、党派をこえて集まったそうです。そして武道館が建った。わが校の柔道部の先輩が、武道館を建てたときの大黒柱だったというわけです。

——意外と早くから、端艇部やバスケット部など洒落たのもあったんですよね。

——文芸部が明治41年に講演会を開いています。

——講演部の活動も活発でした。龍大の講演部が京都市の議事堂を借りて、明治44年に、「関西雄弁大会」を開いている。大正2年には、やはり市会の議事堂を借りて「東西学生雄弁大会」を開く。学校対抗の弁論大会のようなものを、龍大が主催したということでしょうね。

——主催する、というのは、いまでも大変なことでしょう。しかも市会の議事堂を借りられたなんてすごいですね。

——昭和10年前後には、講演部が当時の満州まで遠征して講演会を開いているんですね。

当時、満州へ行くことは、いまのヨーロッパへ行くより大変なことですよ。そういう時代に、クラブ活動で海外まで行っている。

——大正13年には、弓道部、洋楽部(いまでいう吹奏楽部)、卓球部が独立しています。この当時から、洋楽なんて洒落たのがあったんですね。

卓球部は昭和3年に「京都学生卓球連盟」で優勝。これで連続6回の優勝だったというから、かなり強かった。いまも強いですけれども。

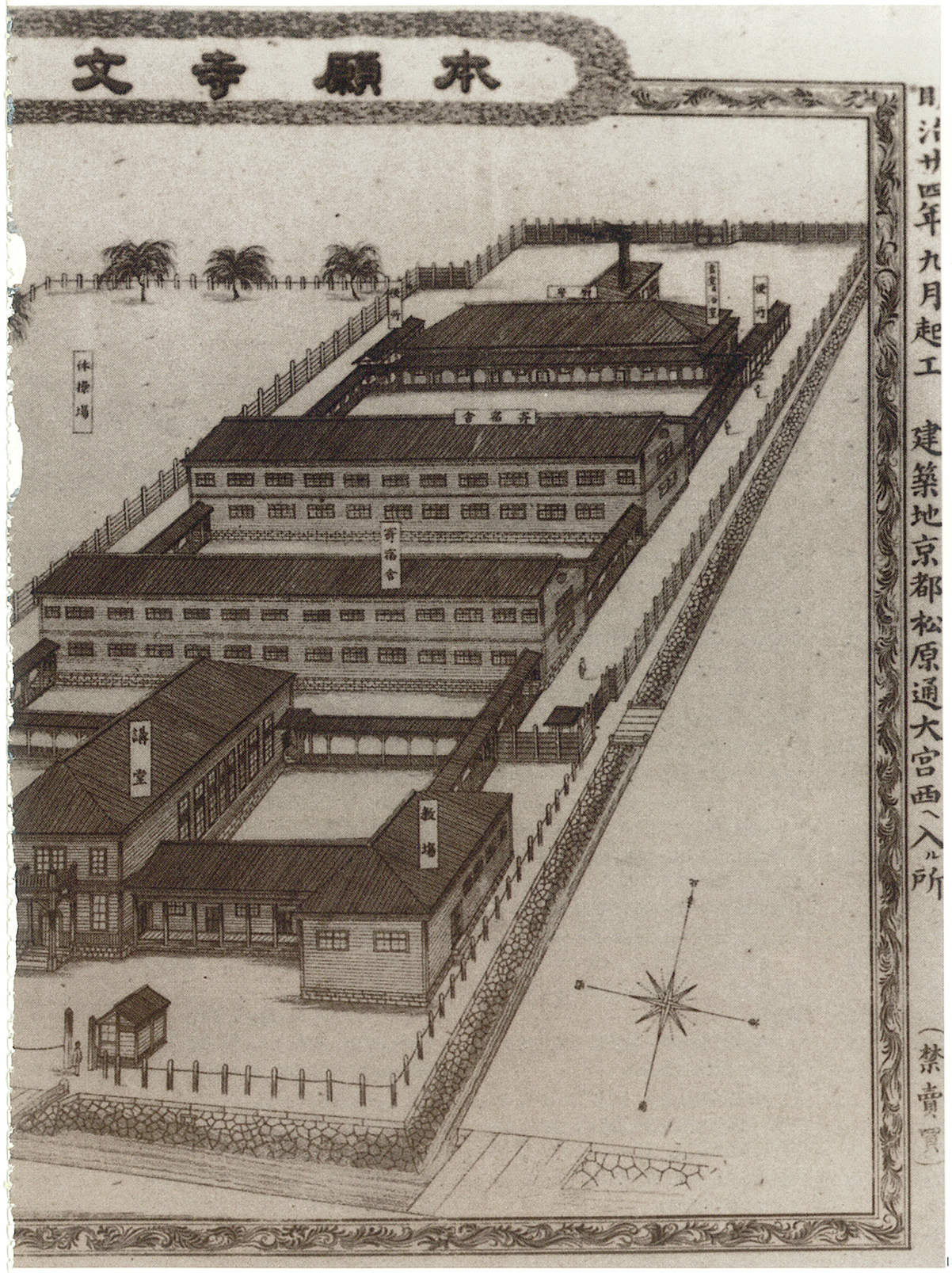
——不思議なもので、昔強かったクラブは、一時的に弱くなってもまた復活するんですね。それが、目に見えない伝統の力とでもいうものなんでしょうか。

——龍谷大学新聞も、レベルの高いものを出していたんですよ。

——いわゆる学生新聞の競争相手としていつも関心をもっていたのは「東大新聞」と「京大新聞」。玄人から見てもかなり文化的なレベルが高かった。実際、私が昭和25年に龍大に入ったとき、読んでもむずかしくてよくわからなかった。(笑)

戦争で廃刊になって、戦後また復刊しています。詩でも文章でも、三好達治や上原専禄など、そのころの一流どころに寄稿を頼んで

THE TRADITIONS OF RYUKOKU I



1892年松原大宮西入に落成した文学寮の図

いました。

――東京の学者とかね。いまなら一大学の新聞になどとうてい書いてもらえないような人、朝日新聞や毎日新聞に執筆、寄稿している人が、龍大の新聞に書いていたんだから。

――『宗教と芸術』という雑誌も、同じようにハイレベルのものでしたね。

――龍大は、古くから文武両道で頑張ってきた。大学も、それがあってはじめて成り立つんじゃあないですか。

総合大学への転身 UIの確立

――高楠順次郎さんたちがいた龍大の「普通教校」の伝統から、やがて「文学寮」というコースのようなものができる。そのあと東京の高輪仏教大学が、分校のような形でできる。

戦後、深草学舎ができて、経済、経営、さらに法学部、瀬田には理工学部と社会学部ができてくるわけですね。

仏教系の学問には宗乗(しゅうじょう)と余乗(よじょう)というのがある。宗乗は宗学ですね。余乗は仏教の他の学問です。

余乗への取り組みは、さかのぼれば「普通教校」、「文学寮」、そういうところに根差しているわけです。いま、それが形として花開いてきた。

――龍大には昔から、大学を発展させよう、進歩的であろうという雰囲気があふれていたんでしょうね。その土壌がなかったら、いまの発展はなかったと思う。

――『反省会雑誌』を生み出した精神、気風が、いろいろな経過をへて深草時代につながってきたと言えるんじゃあないでしょうか。

――必然性があって出てきたものだということですよね。

――やはりそういうところに結びつくと思うんです。法学部の歴史というときにも、20年だけではなくて、「普通教校」までさかのぼることができる。またその「普通教校」は354年前までさかのぼることができる。そう考えるとやはり、354年全部が法学部の歴史なんですよ。輝ける歴史を引き継いでいる。

――次代の「中央公論」を生み出す活力を秘めているとも言えますね。

――大宮の時代がながくて、次は深草の時代。今度は瀬田の時代がくる。瀬田は龍大の殻をまたひとつ打ち破る突破口になる気がします。

――瀬田の開学式に行ったのですが、産業界に有益な人材を出してゆくという産学路線を打ち出した挨拶がありました。ぼくらは大学紛争の時代で、産学路線はすごい批判されていた。時代は変わったと思いました。

――これからの大学を考えてゆくときにアイデンティティ、個性を強く打ち出すことが重要です。

――各大学にはカラーがある。いまの龍大はその部分がちょっと弱い。

――龍大の卒業生から、総理大臣は出ていないが、市長さんや市議会議長さんはたくさん出ているんですよ。目立たないけれども、地域のなかでリーダー的な存在になる人を、たくさん輩出している。

考古学では、高松塚を掘った網干善教さん、藤ノ木古墳を掘った藤井利章さんも龍大でしょう。戦後の文化財発掘にかかわった人がじつに多いわけですね。

――それから「龍谷賞」を受けられた映画監督の松林宗恵さん、能楽・金剛流宗家の金剛厳さん、写真家の井上博道さんらの名をあげたい。誇るべき先輩が、大勢います。

――ある意味で、龍大が脱皮するために深草をつくった。昔から脱皮しようとしては、ひきもどされて、なかなかうまくいかない部分もあった。脱皮しようとする動きは、深草になって実現された。宗門立の大学を超えた新しい大学が、深草で始まったといえるでしょうね。

――350年の歴史といわれても、われわれの意識のなかで捉えられるのは、ここ2、30年でしょう。

――単科大学の時代でも、総合大学にひけをとらない自負はあった。しかし規模も大きくなってきて、実際、慶応や早稲田を意識するようになったのはまだ最近の話ですね。

――脱皮はしたが、今度また逆に、求心力として親鸞を求める。

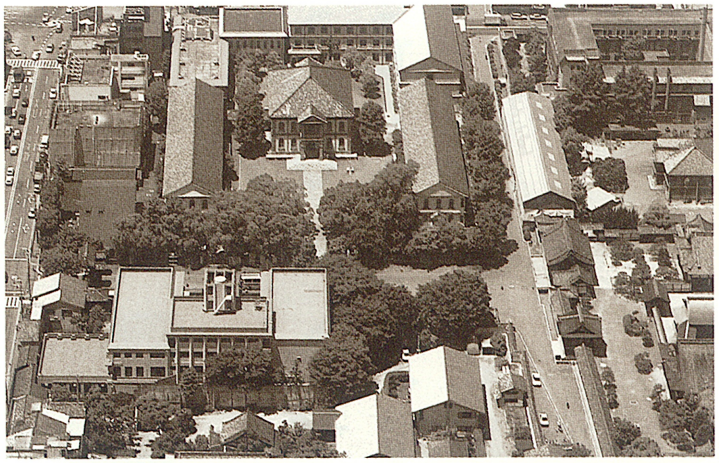
――そう、それがまた大事なんです。

――具体的には、時代のニーズにあった学部を先取りしてつくるのも、龍大のイメージをつくる一つの方法だと思う。

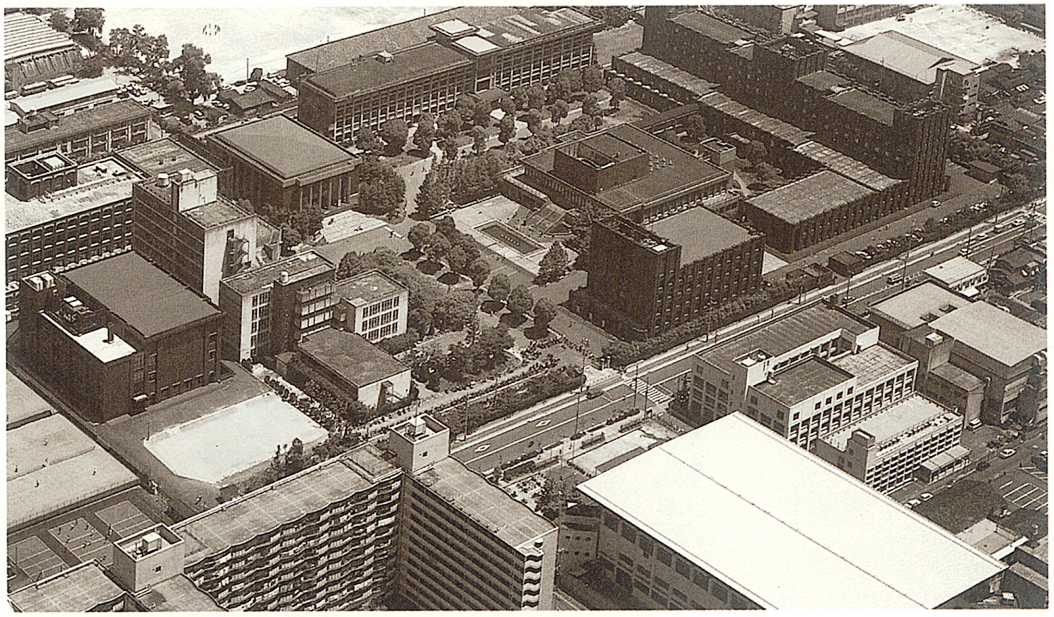
――たしかに、伝統的であることが、閉鎖的になってしまっては、意味がない。

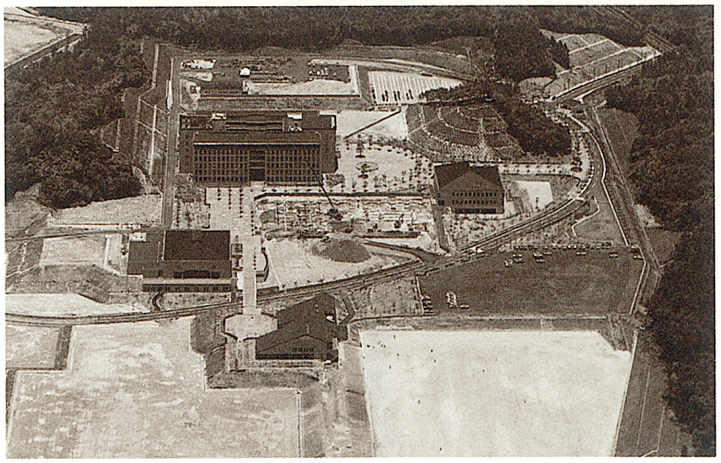
母校を愛する人たちが、充分に話し合うことが、これからの龍大像をつくりあげる大切な第一歩になる。

これから人材を輩出する理工学部・社会学


大宮学舎

部を含めて、在野で頑張っているOBの人たち、母校を愛する者の意見を、充分に聞いてもらえる場をもうけることが必要ではないか、と私は思います。
――そういうことが、将来に向けて、また新しい伝説を生み出していくことにつながっていくんだと思います。


深草学舎


瀬田学舎